

【論文】

大学生における自己教育力と Locus of control の関連¹⁾

The relationship between self-education and
locus of control among university students

山 本 真 菜
YAMAMOTO Mana

目次

1. 問題
2. 方法
 - 参加者
 - 手続き
 - 質問票の構成
3. 結果
 - 分析対象者
 - 尺度の構造確認と信頼性の検討
 - 性差と年齢差の検討
 - 自己教育性尺度と内的・外的統制尺度の尺度得点間の相関
 - 自己教育力と LOC の関連
4. 考察
 - 自己教育力と LOC の下位概念間の関連
 - 性別での異同
 - 年齢別での異同
 - 本研究の限界と今後の課題

(要旨)

自己教育力は学校教育や生涯学習において重要な特性であると考えられる。しかし、自己教育力に関するこれまでの研究では、認知特性の個人差についてあまり扱われていない。そこで本研究では、Locus of control を取り上げ、自己教育力との関係を検討した。質問票を用いて、参加者に自己教育性尺度（梶田, 1985）と内的・外的統制尺度（水口, 1985）に回答を求めた。自己教育力の下位因子は、「自信・プライド・安定性」、「成長・発達性への志向」、「自己への対象化と統制」であり、Locus of control の下位因子は、「努力感の低さ」、「社会的無力感」、「利那性」、「運好機志向」、「自己統制の欠如」であった。回帰分析の結果、内的統制傾向であるほど自己教育力が高いこと、下位概念間の関係性については性別と年齢別で異なることが示された。自己教育力と Locus of control の関係について考察した。

1. 問 題

自己教育とは「ある価値や目標に向かって、自己の内部で葛藤を繰り返しながら自分自身を高めようとする営み」であり、自己教育力とは「自己教育へ向かわせる動因的力量」であると定義されている（小山・河野・赤木・加藤・別惣，1995）。

自己教育力は現代の人間の生涯学習において重要である。その理由として、梶田（1985）は、次の2つを挙げている。1つは、現代社会は複雑で高度であり、その変化の速度は早くなっているため、学校を卒業してからも誰もが時代についていくために、また新しい仕事のやり方を習得するために、絶えず学習を続けなければならないためである。もう1つは、現代社会が豊かになり、多くの人々が時間的・経済的に自らの考えで利用可能な余裕を持つようになったため、その余裕を活用して新たな学習課題に取り組み、生涯にわたって社会的、人間的な成長をはかっていくことが可能になったためである。

大学教育においても、自己教育力を育成するような授業形態が注目されている。国際化や情報化による社会の変化により、学生が講義を聞くだけの形よりも、問題解決の過程や小集団による議論を取り入れることによって能動的に授業に参加することを重視するアクティブラーニングと呼ばれる学習形態が世界的に注目されているのである（永田・林，2016）。アクティブラーニングとは、「読解・作文・討論・問題解決などの活動において分析・統合・評価のような高次思考課題を行う学習」と定義されている（Bonwell & Eison, 1991; 永田・林，2016）。

以上で述べたように、自己教育力は生涯にわたって個人の学習に影響を与える要因であり、学校教育においても自己教育力を育成するような能動的な学習形態が注目されている。本研究では、自己教育力を規定する要因

を検討することを目的とする。

梶田（1985）は、自己教育力を構成する内容として、「成長・発展への志向」、「自己の対象化と統制」、「学習の技能と基盤」、「自信・プライド・安定感」の4つを挙げている。梶田（1985）は、これらの概念の構造を次のように述べている。自己教育を行っていく上での基本的な志向性と、その志向性に沿って自分自身を前進させていく力と、その前身の過程で道具的な意味を持つ学び方や基礎学力と、そうしたすべてを一人の人格の中に落ち着かせ、安定した土台の上に立って前進を可能にする心理的基盤とで構成されている。自己教育力の各側面について詳しくみると、自己教育にとって第1に重要な意義を持つ側面であるとされる「成長・発達への志向」は、現在あるがままの自分の姿から脱皮して、少しでも優れた存在へ自分自身を引き上げていくといった志向性を持つことである。具体的には、自己の成長・発達に関わる感覚とその認知面での現れといった「目標の感覚・意識」、そして、それらを支える情意的な基盤としての「達成・向上の意欲」という2つの視点から捉えることができる。第2の「自己への対象化と統制」は、自分自身の現状と可能性、課題等を認識し、自分自身が選びとった方向へ自分自身が近づくように自分自身に働きかけるという構えと能力であり、具体的には、「自己の認識と評価の力」と「自己統制の力」という2つの視点から考えられる。第3の「学習の技能と基盤」は、学校教育で直接的に形成される具体的な形での学力であり、これは「学び方の知識と技能」を身に着けるという視点から、また「基礎的な知識・理解・技能」をきちんと習得するという視点から考えられる。第4の「自信・プライド・安定感」は、以上で述べた3側面を最も深いところにおいて支えるものであり、長い見通しをもって着実な努力を少しずつ積み重ねていくことができるためには、静かで落ち着い

た自分なりの自負と自信、そしてそれに支えられた心理的な安定性が不可欠であるとされている。梶田 (1985) は、「学習の技能と基盤」を除いた「成長・発展への志向」、「自己の対象化と統制」および「自信・プライド・安定感」の3側面を含めた自己教育性尺度を作成している。

これまで、自己教育力に関連する要因を検討した研究には次のようなものがある。大学生においてレジリエンスの高群は低群に比べ自己教育力が高いこと (森・清水・石田・富永・Chok, 2002)、薬剤師の職務に関する不安感自己教育力と負の相関関係があること (平島・伊藤・道志・國井・井手口, 2009)、一人配置の養護教諭において職務上困難感と自己教育力との間に負の相関関係があり、自己教育力の高群は低群に比べ職務上困難感が低いこと (石田・園田, 2016)、両親の養育態度によって自己教育力に差があること (篠原・井上, 1991)、教師の経年的な経験によって自己教育力に違いがあること (小山他, 1995)、心筋梗塞患者において支援形成が自己教育力を高めること、支援形成が自己教育力を媒介して自己管理行動を高めること (花田, 2010) などが示されている。このように、自己教育力に関連する要因として、性格特性要因や環境要因は検討されているが、認知特性との関連はまだあまり検討されていない。そこで、本研究では、自己教育力に関連する認知特性として自己統制感に着目する。自己統制感とは、個人の学習を規定する要因であることが示されており (e.g., Ghasemzadeh & Saadat, 2011; Hasan & Khalid, 2014; 速水・長谷川, 1979)、自己教育力との関連が予測される。

自己統制感の統制に関する期待の位置、すなわち、物事の生起を自分の能力や努力に期待するタイプかまたは幸運など自分以外の力に期待するタイプかの認知傾向がある。人がある結果を生じさせるには、そのための行動

を起こす必要がある。行動の生起には、自分にはその結果を生じさせることができるという期待が媒介しており、人々は自分の能力や努力によって「成功する」可能性があると認知しているからこそ何らかの行動を起こすのであって、初めから自分が何をしていても成功する可能性がないと認知していればそもそも行動を起こさないのである。このような結果期待の認知特性として、Locus of Control (Rotter, 1966; LOC) がある。LOC は、社会的学習理論にその起源があり、社会的行動が生起する可能性を予測するモデルの変数の1つである。いくつかの生起可能な行動があるとき、そのなかでもっとも強い可能性をもつ行動を決定するものは、個人が置かれている心理的事態と、そこで起こす行動に随伴して強化が生起するだろうとの期待と、そのとき得られる強化価値の3要素である (水口, 1985)。このなかでも「期待」はもっとも重みをもつ要因であり、この期待は過去の経験から積み重ねられて形成されるものであり、その個人の経験によって内的統制方向か外的統制方向かに分化される。このように、どの程度自分の行為が成功、失敗といった結果に影響するかという個人の信念がLOCである。すなわち、ある行為の後に強化 (例えば、成功) がもたらされた場合に、この出来事が自分の行為と無関連に起こった (例えば、運、偶然、運命、他者のおかげ) と考えるような傾向を外的統制 (external control) といい、この出来事が自分自身の行為、あるいは自分の特性に随伴して生じたと考えるような傾向を内的統制 (internal control) という (水口, 1985)。例えば、テストの点数が運などの自分以外の力に左右されていると考える傾向が外的統制、自分の努力や能力の反映だと考える傾向は内的統制といえる。外的統制傾向の個人は、自分の努力や能力ではテストで良い点数が得られるわけがないという信念が強い。そのため、努力や能力には期待せず他力本願にな

り、一方、内的統制傾向の個人は、自分の努力や能力によってテストで良い点数が得られるという信念が強いいため、その達成に向けて意欲的に取り組むことができる。

LOC は安定的な認知的特性と考えられており、測定尺度が開発されている (Rotter, 1966; Mirels, 1970)。LOC の尺度は、一般的な尺度以外にも、子供用、学業用や健康用など限定した対象や場面での測定尺度も開発されている (Nowicki & Strickland, 1973; Trice, 1985; Wallston, Wallston, & Devellis, 1978)。Rotter (1966) の尺度は日本語版尺度も開発されており (例えば、水口, 1985; 鎌原・樋口・清水, 1982), 水口 (1985) の尺度では、下位因子として、「努力観」, 「利那性」, 「自己統制」, 「運好機志向」, 「社会的努力感」の 5 つの因子があり、これらの合計得点が高いほど外的統制傾向であり合計得点が低いほど内的統制傾向であることを示す。水口 (1985) は、下位因子ごとの認知傾向を次のように説明している。「努力観」における内的統制型の傾向は、「成功は努力によるという信念が強い。努力は社会的に認められるという信念が強い。努力は社会や人生で重要視。」であり、外的統制型の傾向は「努力はむなしいという信念が強い。労して効なし。正直者は馬鹿をみる。やってもやらなくても同じという意識。」というものである。「利那性」における内的統制型の傾向は「将来を展望して行動する。計画的に行動する。堅実的な行動を好む。」であり、外的統制型の傾向は「出たとこ勝負的に行動する。目先のことに価値をおく。極端な行動を好む。楽観的。」というものである。「自己統制」における内的統制型の傾向は「安定性がある。自立性がある。自分に厳しい。忍耐性がある。」であり、外的統制型の傾向は「動揺しやすい。人当たりがよい。他者依存の傾向が強い。度胸がない。」というものである。「運好機志向」における内的統制型の傾向は「自分の行為に責任

帰属。経験を生かす行動様式。成功を自分の能力や努力に期待。」であり、外的統制型の傾向は「自己以外に責任帰属。運・チャンスまかせの行動様式。運命論者。」というものである。「社会的力量感」における内的統制型の傾向は「社会的な有能感。社会的影響を及ぼせる信念が強い。環境を支配する。逆境に強い。」であり、外的統制型の傾向は「社会的な無力感。社会的に弱小意識が強い。逆境に弱い。同調的。」というものである。

LOC に関するこれまでの研究では、外的統制傾向に比べ内的統制傾向の個人の方が、望ましい結果が得られることが示されている。例えば、学業については、中学生において内的統制傾向は望ましい学業成績を予測し (速水・長谷川, 1979), 大学生において内的統制傾向であるほど学業成績が良く (Ghasemzadeh & Saadat, 2011; Hasan & Khalid, 2014), 内的統制傾向であるほど GPA が高く (Hasan & Khalid, 2014), 大学生において内的統制傾向の個人は外的統制傾向の個人に比べ、学習能力が高く、学習に積極的、効果的に取り組むこと (Özen-Kutanis, Mesci, & Övdür, 2011) などが示されている。学業に限らない事柄についても、内的統制傾向であるほど課題の先延ばし行動がされにくく (藤田, 2012; Janssen & Carton, 1999), また、幼児期における内的統制傾向は成人期の健康や健康的習慣を予測すること (Gale, Batty & Deary, 2008), 内的統制傾向であるほど健康的行動が多く、不健康な症状が少ないこと (Ryon & Gleason, 2014) などが示されている。

以上の先行研究では、LOC が内的統制傾向の個人は外的統制傾向の個人に比べて望ましい学習習慣や成績、さらに、学業に限らない望ましい行動や結果が得られることが示されている。しかし、このような関係については LOC が直接的に望ましい行動や結果を予測しているのではなく、自己教育力が媒介

要因として存在している可能性が考えられる。そこで本研究では、自己統制感の統制に関する期待の位置についての認知特性である LOC を取り上げ、望ましい行動や結果を生じさせると考えられる自己教育力に影響を与えているかどうかを検討する。

本研究の目的

本研究では、自己教育力を規定する認知特性として LOC を取り上げ、LOC が内的統制傾向であるほど自己教育力が高いと予測する。さらに、自己教育力の下位概念である「成長・発達への志向」、「自己の対象化と統制」および「自信・プライド・安定感」と LOC の下位概念である「努力感」、「利他性」、「自己統制」、「運好機志向」および「社会的努力感」との関連も探索的に検討する。

2. 方法

参加者

大学生 116 名（男性 64 名、女性 52 名；平均年齢 20.09 歳（ $SD = 1.06$ 歳，range = 19-23 歳），年齢不明 10 名）が本研究の調査に参加した。

手続き

授業時間内を利用して、以下の質問票に回答を求めた。調査者は、質問票を参加者に配布し、研究協力の任意性と個人情報保護されることなどを質問票の表紙に明記し、口頭でも説明を行った。具体的には、調査への参加は自由でありいかなる時点においても参加を取りやめることができ、参加を取りやめたことによって不利益が生じることは一切ないこと、この調査で得られたデータは研究目的以外で使用するのではなく結果は統計的に処理され個人が特定されるような使用はしないこと、質問票への回答をもって調査への参加に同意したとみなすことを説明した。質問票への回答は、最後まで各自で進めるように指示をした。全員の回答が終わった後、質問票

を回収した。実施時間は、依頼、説明、回答を含めて 20 分程度であった。

調査は 2 回に分けて行われ、第 1 回目は 2018 年 6 月であり、第 2 回目は 2019 年 6 月であった。2 回の調査は、同じ大学の同じ授業を履修していた参加者に対して行われたため、2 つの参加者集団は等質であると考えられる。

質問票の構成

質問票は、以下の内容で構成されていた。

デモグラフィック変数 参加者の氏名、所属学科、学籍番号、年齢、性別の回答を求めた。なお、本調査は授業内容の理解促進のためにも利用されたため、氏名、所属学科、学籍番号の記入を求めたが、これらについては研究での利用に関しては個人を特定できるような使用はしないことを教示した。

自己教育力 自己教育力を測定するために、自己教育性尺度（梶田，1985）に 7 件法（1：全然そう思わない，2：余りそう思わない，3：どちらかといえばそうは思わない，4：どちらともいえない，5：どちらかといえばそう思う，6：かなりそう思う，7：全くそう思う）で回答を求めた。自己教育性尺度は全部で 30 項目であり、Ⅰ「成長・発達性への志向（Self-Development）」、Ⅱ「自己への対象化と統制（Self-Competence）」、Ⅲ「自信・プライド・安定性（Self-Confidence）」の 3 因子構造である。それぞれの因子はすべて 10 項目で構成されている。なお、自己教育性尺度では、逆転項目が 10 項目設けられている。

下位因子ごとの質問項目は次の通りである。なお、数字は質問票での提示順序を示す。Ⅰ「成長・発達性への志向（Self-Development）」は、「1. 将来、他人から尊敬される人になりたいか。」、「4. 自分の能力を最大限に伸ばすよう、いろいろ努力したい。」、「7. たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい。」、「10. 自分で

なければ、やれないことをやってみたい。』,「13. 自分がやり始めたことは、最後までやり遂げたい。』,「16. 社会では良い仕事をし、多くの人に認められたい。』,「19. 自分の希望をあくまでも貫こうとする。』,「22. いったい何のために努力するのだろうか、いやになることがある。』(逆転項目),「25. ほんやりと、何も考えずにすごしてしまうことが多い。』(逆転項目),「28. 人の人生は、結局偶然のことで決まると思う。』(逆転項目)の10項目である。

Ⅱ「自己への対象化と統制 (Self-Competence)」は、「2. 自分の良くないところを自分で考え直すよう、いつも心がけている。』,「5. 自分の考え、行動が批判されても腹をたてない。』,「8. 自分の良いところ悪いところは、よくわかっている。』,「11. 他人から欠点を指摘されると、自分でも考えてみようとする。』,「14. できるだけ自分を押さえて、他人に合わせようとしている。』,「17. 腹がたっても、ひどいことを言ったりしないように注意している。』,「20. 疲れているときには、何もしたくない。』(逆転項目),「23. テレビを見たり遊んでしまっ、計画どおりにいかないことが多い。』(逆転項目),「26. ちょっといやなことがあると、すぐに不機嫌になる。』(逆転項目),「29. いやになった時でも、もうちょっと、もうちょっとだけ、と頑張る。』の10項目である。

Ⅲ「自信・プライド・安定性 (Self-Confidence)」は、「3. 今のままの自分では、いけないと思うことがある。』(逆転項目),「6. 他の人に馬鹿にされるのは、我慢できない。』,「9. 時々、自分自身がいやになる。』(逆転項目),「12. 何をやっても、駄目だと思う。』(逆転項目),「15. 自分のことを、恥ずかしいと思うことがある。』(逆転項目),「18. 今の自分が幸福だと思う。』,「21. 自分のやっていることに、自信をもっている方だと思う。』,「24. 生まれ変わるとしたら、やはり今の自

分に生まれたい。』,「27. 今の自分に満足している。』,「30. 自分にも、いろいろ取り柄があると思う。』の10項目である。

LOC LOCを測定するために、内的一外的統制尺度(水口, 1985)に7件法(1:全然そう思わない, 2:余りそう思わない, 3:どちらかといえばそうは思わない, 4:どちらともいえない, 5:どちらかといえばそう思う, 6:かなりそう思う, 7:全くそう思う)で回答を求めた。内的一外的統制尺度は全部で30項目であり、Ⅰ「努力感 (Endeavor)」, Ⅱ「刹那性 (Momentary)」, Ⅲ「自己統制感 (Self-Control)」, Ⅳ「運好機志向 (Luck Expectation)」, Ⅴ「社会的力量感 (Social Potency)」の5因子構造である。それぞれの因子はすべて6項目で構成されている。なお、内的一外的統制尺度には逆転項目は設けられていない。

下位因子ごとの質問項目は次の通りである。Ⅰ「努力感 (Endeavor)」は、「1. この世の中では、努力が無駄に終わってしまうことがかなり多い。』,「6. この世の中では努力に対して報いられることはごく稀である。』,「11. 努力や能力だけで物事がうまくいくと期待するのは単純すぎる。』,「16. 努力してもその成果がよい成績となって表れることはごく稀である。』,「21. よいポストにつけるか否かは、たまたま、その時その場に居合わせたかどうかによる。』,「26. この世の中ではまじめな者が余りにも報いられない。』の6項目である。

Ⅱ「刹那性 (Momentary)」は、「2. 人生は成り行きに任せた方が、案外うまくいく。』,「7. 物事は運、不運にみまわれるから余り先のことまで計画を立てても役にたたない。』,「12. 厄介な問題に直面したとき、そのことについて余り考えこまないのが賢いやり方だ。』,「17. 人生はなるようにしかならないから、くよくよしてもはじまらない。』,「22. 遠い将来の成功を求めて苦勞するよりも、現

在の生活を楽しく送った方がよい。』, 「27. 厄介なことを決断しなければならないとき, 丁か半かで決めると案外うまくいく。」の6項目である。

Ⅲ「自己統制感 (Self-Control)」は, 「3. 私は能力不足だと思い込んで物事をあきらめてしまうことが多い。』, 「8. 私はややもすればいい加減に行動してしまうことが多い。』, 「13. 私はいつも統制されていなければ怠けてしまうおそれがある。』, 「18. 私は自分のことを自分で始末するのがにが手である。』, 「23. 私は物事にききっぱい方である。』, 「28. 私は今でも自分の生き方についてはっきりした考えをもてないでいる。」の6項目である。

Ⅳ「運好機志向 (Luck Expectation)」は, 「4. 好むと好まざるとにかかわらず, 人生ではチャンス (好機) とか幸運とかが重要な役割を果たしている。』, 「9. 願いごとがかなえられるか否かは運, 不運とかなり深い関係がある。』, 「14. 人生には“偶然”ということがあるから希望が持てる。』, 「19. 運命を信じて生きなければ余りに夢がない。』, 「24. 人が不幸にあったとしたら, その人はそのような運命にあったと考えるべきである。』, 「29. 運の強い人は結局成功をおさめる。」の6項目である。

Ⅴ「社会的力量感 (Social Potency)」は, 「5. その気になって頑張っても, この世は私にとって余りにもままならない。』, 「10. 自分の身に振りかかる問題に対して, 私は余りにも無力である。』, 「15. 多くの人は自分ではどうすることもできない境遇の犠牲者である。』, 「20. 私のやることは裏目にばかり出て, ツイていないと思うことがしばしばある。』, 「25. 社会の仕組みが出来上がってしまっているので, 私の力が生かされる余地は少ない。』, 「30. しばしば私は他人に利用されていると思うことがある。」の6項目である。

3. 結 果

分析対象者

参加者 116 名について, 自己教育性尺度と内的—外的統制尺度の2つの尺度のうちどちらか1つの尺度について全く回答していなかった23名を以下の分析から除外し, 93名のデータを分析に用いた。したがって, 有効回答率は, 80.17%であった。なお, 分析から除外した23名のうち自己教育性尺度に回答していなかった参加者は15名, 内的—外的統制尺度に回答していなかった参加者は8名であった。

自己教育性尺度において欠損値があった参加者が1名いたが, 欠損値は1項目のみであったため, 当該尺度の平均値で置き換えた。その他の分析対象者については欠損値はなかった。

分析に用いた93名の参加者の内訳は, 男性49名, 女性44名, 平均年齢20.07歳 ($SD = 1.06$ 歳, range = 19-23 歳; 年齢不明1名) であった。

尺度の構造確認と信頼性の検討

天井効果とフロア効果の検討 まず, 尺度内のある項目に対する反応が極端に偏っている場合, その尺度項目は参加者の個人差を捉えていなかったと考えられるため, 測定値が上限に偏る天井効果と下限に偏るフロア効果を確認した。具体的には, 各項目の平均値 + 標準偏差の値が取り得る最高値 (7 点) 以上の場合を天井効果として, 各項目の平均値 - 標準偏差の値が取り得る最低値 (1 点) 以下である場合をフロア効果とした。

その結果, 自己教育性尺度の項目では, 天井効果はみられなかったが, フロア効果が生じている項目が2項目みられた。それらは, 「3. 今のままの自分では, いけないと思うことがある。」(逆転項目)と「20. 疲れているときは, 何もしたくない。」(逆転項目)の2項目であった。したがって, 自己教育性尺度

については、この2項目を除いて以下の分析を行った。内的-外的統制尺度の項目では、天井効果もフロア効果もみられなかった。

自己教育性尺度の因子分析 次に、自己教育性尺度の因子構造を検討するために、先行研究と同様の3因子を指定し、28項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った（Table1）。その結果、どの因子においても因子負荷量が絶対値.40未満である項目が6項目みられた。それらは、「18. 今の自分が幸福だと思う。」「23. テレビを見たり遊んでしまっ、計画どおりにいかないことが多い。」（逆転項目）、「7. たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい。」「13. 自分がやり始めたことは、最後までやり遂げたい。」「28. 人の人生は、結局偶然のことで決まると思う。」（逆転項目）、「14. できるだけ自分を押さえて、他人に合わせようとしている。」であった。この6項目を除いた22項目について、再び因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果、どの因子においても因子負荷量が絶対値.40未満である項目が2項目みられた（「25. ほんやりと、何も考えずにすごしてしまうことが多い。」（逆転項目）、「29. いやになった時でも、もうちょっと、もうちょっとだけ、と頑張る。」）。この2項目を除いた20項目について、再び因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果、どの因子においても因子負荷量が絶対値.40未満である項目が1項目みられた（「11. 他人から欠点を指摘されると、自分でも考えてみようとする。」）。この1項目を除いた19項目について、再び因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果、先行研究と同様の3因子構造が確認された。

第1因子は、「21. 自分のやっていることに、自信をもっている方だと思う。」などの項目が高い負荷量を示したため、「自信・プライド・安定性」とした（10項目）。この因子に含ま

れる「19. 自分の希望をあくまで貫こうとする。」「8. 自分の良いところ悪いところは、よくわかっている。」「22. いったい何のために努力するのだろうか、いやになることがある。」（逆転項目）の3項目は、先行研究（梶田, 1985）では他の因子に含まれているが、「自信・プライド・安定」を表す項目と解釈できると考えた。第2因子は、「1. 将来、他人から尊敬されるような人になりたいか。」などの項目が高い負荷量を示したため、「成長・発達性への志向」とした（5項目）。この因子に含まれる「2. 自分の良くないところを自分で考え直すよう、心がけている。」は、先行研究（梶田, 1985）では他の因子に含まれているが、「成長・発達性への志向」を表す項目と解釈できると考えた。第3因子は、「17. 腹がたっても、ひどいことを言ったりしないように注意している。」などの項目が高い負荷量を示したため、「自己への対象化と統制」とした（4項目）。この因子に含まれる「6. 他の人に馬鹿にされるのは、我慢できない。」は先行研究（梶田, 1985）では他の因子に含まれているが、「自己への対象化と統制」を表す項目と解釈できると考えた。

各下位因子の内的-一貫性を確認するために、Cronbachの α 係数を算出したところ、「自信・プライド・安定性」は $\alpha = .835$ 、「成長・発達性への志向」は $\alpha = .759$ 、「自己への対象化と統制」は $\alpha = .621$ であった。各下位因子において項目の平均値を算出し尺度得点とし（Table2）、さらに、本研究の因子分析の結果から、自己教育性尺度のうち19項目において因子構造が確認されたため、この19項目の合計値を自己教育力得点とした（ $\alpha = .752$ ）。これらの得点の α 係数は概ね高い値であったため、これらの得点を以下の分析で使用した。なお、これらの得点は、値が高いほど自己教育力が高いことを示す。

大学生における自己教育力と Locus of control の関連

Table1. 自己教育性尺度の因子分析の結果 (主因子法・プロマックス回転)

項目	先行研究における因子構造	I	II	III
I 自信・プライド・安定性 ($\alpha = .835$)				
自分のやっていることに、自信をもっている方だと思う。	自信・プライド・安定性	.714	.038	.050
時々、自分自身がいやになる。(R)	自信・プライド・安定性	-.702	.197	.107
自分にも、いろいろ取り柄があると思う。	自信・プライド・安定性	.681	.188	.110
何をやっても、駄目だと思う。(R)	自信・プライド・安定性	-.623	-.068	.138
今の自分に満足している。	自信・プライド・安定性	.622	-.079	.046
自分のことを、恥ずかしいと思うことがある。(R)	自信・プライド・安定性	-.614	.247	-.071
自分の希望をあくまでも貫こうとする。	成長・発達性への志向	.511	.219	.264
自分の良いところ悪いところは、よくわかっている。	自己への対象化と統制	.488	.281	-.108
生まれ変わるとしたら、やはり今の自分に生まれた い。	自信・プライド・安定性	.438	-.044	-.178
いったい何のために努力するのだろうか、いやにな ることがある。(R)	成長・発達性への志向	-.426	-.081	.228
II 成長・発達性への志向 ($\alpha = .759$)				
将来、他人から尊敬される人になりたいが。	成長・発達性への志向	.014	.707	.033
自分の能力を最大限に伸ばすよう、いろいろ努力した い。	成長・発達性への志向	.008	.624	.075
自分でなければ、やれないことをやってみたい。	成長・発達性への志向	.063	.624	.043
社会では良い仕事をし、多くの人に認められたい。	成長・発達性への志向	-.049	.616	.082
自分の良くないところを自分で考え直すよう、いつも 心がけている。	自己への対象化と統制	-.104	.579	-.284
III 自己への対象化と統制 ($\alpha = .621$)				
腹がたっても、ひどいことを言ったりしないように注 意している。	自己への対象化と統制	-.105	.279	-.603
自分の考え、行動が批判されても腹をたてない。	自己への対象化と統制	.094	-.037	-.568
他の人に馬鹿にされるのは、我慢できない。	自信・プライド・安定性	-.048	.099	.523
ちょっといやなことがあると、すぐに不機嫌になる。 (R)	自己への対象化と統制	-.181	.197	.501
因子間相関 I			.220	.001
II				.184

注. (R) は逆転項目を示す。

内的—外的統制尺度の因子分析 内的—外的統制尺度の因子構造を検討するために、先行研究と同様の5因子を指定し、30項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った（Table3）。その結果、どの因子においても因子負荷量が絶対値.40未満である項目が6項目みられた。それらは、「28. 私は今でも自分の生き方についてはっきりした考えをもてないでいる。」、「25. 社会の仕組みが出来上がってしまっているの、私の力が生かされる余地は少ない。」、「30. しばしば私は他人に利用されていると思うことがある。」、「26. この世の中ではまじめな者が余りにも報いられない。」、「24. 人が不幸にあったとしたら、その人はそのような運命にあったと考えるべきである。」、「7. 物事は運、不運にままわれるから余り先のことまで計画を立てても役にたたない。」であった。この6項目を除いた24項目について、再び因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果、先行研究と同様の5因子構造が確認された。

第1因子は、「6. この世の中では努力に対して報いられることはごく稀である。」などの項目が高い負荷量を示したため、羽石・地代・外島・松田・渡辺（1995）に基づき、「努力感の低さ」とした（4項目）。第2因子は、「10.

自分の身に振りかかる問題に対して、私は余りにも無力である。」などの項目が高い負荷量を示したため、羽石他（1995）に基づき、「社会的無力感」とした（5項目）。この因子に含まれる「3. 私は能力不足だと思い込んで物事をあきらめてしまうことが多い。」と「18. 私は自分のことを自分で始末するのがにが手である。」の2項目は、水口（1985）では他の因子に含まれているが、「社会的無力感」を表す項目と解釈できると考えた。第3因子は、「27. 厄介なことを決断しなければならないとき、丁か半かで決めると案外うまくいく。」などの項目が高い負荷量を示したため、「利那性」とした（6項目）。この因子に含まれる「19. 運命を信じて生きなければ余りに夢がない。」と「14. 人生には“偶然”ということがあるから希望が持てる。」の2項目は、水口（1985）では他の因子に含まれているが、「利那性」を表す項目と解釈できると考えた。第4因子は、「9. 願いごとがかなえられるか否かは運、不運とかなり深い関係がある。」などの項目が高い負荷量を示したため、「運好機志向」とした（6項目）。この因子に含まれる「21. よいポストにつけるか否かは、たまたま、その時その場に居合わせたかどうかによる。」、「15. 多くの人は自分ではどうすることもできない境遇の犠牲者であ

Table2. 自己教育性尺度と内的—外的統制尺度の各得点の記述統計量（ $N=93$ ）

	α	M	SD	Range
自己教育力	.752	86.46	12.65	75.00-127.00
自信・プライド・安定性	.835	4.16	1.01	1.30-7.00
成長・発達性への志向	.759	5.56	0.85	1.60-7.00
自己への対象化と統制	.621	4.26	1.14	1.00-6.75
LOC	.794	100.87	16.10	49.00-136.00
努力感の低さ	.776	3.69	1.27	1.00-7.00
社会的無力感	.728	3.74	1.11	1.00-6.60
利那性	.728	4.52	1.04	1.17-6.67
運好機志向	.694	4.49	0.98	1.83-6.50
自己統制の欠如	.621	4.45	1.27	1.33-7.00

大学生における自己教育力と Locus of control の関連

Table3. 内的一外的統制尺度の因子分析の結果（主因子法・プロマックス回転）

項目		先行研究における因子構造					I	II	III	IV	V	
I 努力感の低さ ($\alpha = .776$)												
この世の中では努力に対して報いられることはごく稀である。	努力感の低さ	.893	-.009	.038	-.026	-.044						
努力してもその成果がよい成績となって表れることはごく稀である。	努力感の低さ	.675	-.126	-.025	.192	.095						
この世の中では、努力が無駄に終わってしまうことがかなり多い。	努力感の低さ	.644	.142	-.070	-.058	.166						
努力や能力だけで物事がうまくいくと期待するのは単純すぎる。	努力感の低さ	.407	-.051	.101	.181	-.031						
II 社会的無力感 ($\alpha = .728$)												
自分の身に振りかかる問題に対して、私は余りにも無力である。	社会的無力感	.099	.776	-.020	-.077	.029						
その気になって頑張っても、この世は私にとって余りにもままならない。	社会的無力感	.248	.590	.102	.216	-.066						
私のやることは裏目にばかり出て、ツイていないと思うことがしばしばある。	社会的無力感	-.098	.576	-.087	.158	.105						
私は能力不足だと思い込んで物事をあきらめてしまうことが多い。	自己統制の欠如	-.151	.501	-.219	.181	.384						
私は自分のことを自分で始末するのがにが手である。	自己統制の欠如	-.099	.435	.092	-.045	.059						
III 利索性 ($\alpha = .728$)												
厄介なことを決断しなければならないとき、丁か半かで決めると案外うまくいく。	利索性	.027	.249	.770	-.229	-.087						
厄介な問題に直面したとき、そのことについて余り考えこまないのが賢いやり方だ。	利索性	.164	-.098	.582	-.055	.159						
運命を信じて生きなければ余りに夢がない。	運好機志向	-.212	.089	.512	.166	-.040						
人生はなるようにしかならないから、くよくよしてもはじまらない。	利索性	.127	-.084	.486	.085	.109						
人生には“偶然”ということがあるから希望が持てる。	運好機志向	-.068	-.126	.482	.296	-.015						
人生は成り行きに任せた方が、案外うまくいく。	利索性	-.066	-.205	.404	.160	.325						
IV 運好機志向 ($\alpha = .694$)												
願いごとがかなえられるか否かは運、不運とかなり深い関係がある。	運好機志向	.165	.090	-.052	.704	-.181						
好むと好まざるとにかかわらず、人生ではチャンス（好機）とか幸運とかが重要な役割を果たしている。	運好機志向	.055	-.205	-.028	.515	.258						
よいポストにつけるか否かは、たまたま、その時その場に居合わせたかどうかによる。	努力感の低さ	.088	.217	.085	.487	-.089						
多くの人は自分ではどうすることもできない境遇の犠牲者である。	社会的無力感	.232	-.025	-.057	.478	-.108						
運の強い人は結局成功をおさめる。	運好機志向	-.070	.199	.209	.451	.051						
遠い将来の成功を求めて苦労するよりも、現在の生活を楽しんで送った方がよい。	利索性	-.100	.014	.080	.446	-.188						
V 自己統制の欠如 ($\alpha = .621$)												
私はややもすればいい加減に行動してしまうことが多い。	自己統制の欠如	.154	.072	-.007	-.207	.722						
私は物事にあきっぽい方である。	自己統制の欠如	-.130	.174	.139	-.090	.572						
私はいつも統制されていなければいけないおそれがある。	自己統制の欠如	.108	.024	.070	-.110	.514						
因子間相関								I	.220	-.019	.358	.251
								II		-.069	.132	.064
								III			.230	.025
								IV				.348

る。], 「22. 遠い将来の成功を求めて苦勞するよりも, 現在の生活を楽しく送った方がよい。」の3項目は, 水口(1985)では他の因子に含まれているが, 「運好機志向」を表す項目と解釈できると考えた。第5因子は, 「8. 私はややもすればいい加減に行動してしまうことが多い。」などの項目が高い負荷量を示したため, 羽石他(1995)に基づき, 「自己統制の欠如」とした(3項目)。

各下位因子の内的―貫性を確認するために, Cronbach の α 係数を算出したところ, 「努力感の低さ」は $\alpha = .776$, 「社会的無力感」は $\alpha = .728$, 「刹那性」は $\alpha = .728$, 「運好機志向」は $\alpha = .694$, 「自己統制の欠如」は $\alpha = .621$ であった。各下位因子において項目の平均値を算出し尺度得点とし (Table2), さらに, 本研究の因子分析の結果から, 内的―外的統制尺度のうち24項目において因子構造が確認されたため, この24項目の合計値を LOC 得点とした ($\alpha = .794$)。これらの得点の α 係数は概ね高い値であったため, これらの得点を以下の分析で使用した。なお, これらの得点は, 値が低いほど内的統制傾向であり, 値が高いほど外的統制傾向であることを示す。

性差と年齢差の検討

自己教育性尺度における自己教育力得点と3つの下位尺度得点, 内的―外的統制尺度における LOC 得点と5つの下位尺度得点について, 性差と年齢差があるかどうかを検討した。

尺度得点の性差 まず, 性差について検討するために t 検定を行ったところ, 次のような結果が得られた (Table4)。自己教育性尺度については, 自己教育力得点は, 女性 ($M = 83.57, SD = 12.20$) に比べ男性 ($M = 89.06, SD = 12.61$) の方が有意に高く ($t(91) = 2.130, p = .036, d = .443$), 自己への対象化と統制得点は, 女性 ($M = 3.99, SD = 1.19$) に比べ男性 ($M = 4.51, SD = 1.06$) の方が有意に高かった ($t(91) = 2.219, p = .029, d = .459$)。なお, 自信・プライド・安定性得点と成長・発達性への志向得点については有意な差はみられなかった ($t(91) = 1.513, p = .134, d = .315$; $t(91) = 0.315, p = .753, d = .066$)。

内的―外的統制尺度については, 努力感の低さ得点は, 女性 ($M = 3.40, SD = 1.02$) に比べ男性 ($M = 3.94, SD = 1.42$) の方が有意に高く ($t(86.81) = 2.125, p = .036, d = .438$), 運好機志向得点は, 女性 ($M = 4.31, SD = 0.95$) に比べ男性 ($M = 4.65, SD = 0.99$)

Table4. 性別の各得点の平均値と標準偏差 ($N = 93$)

	男性参加者 ($n = 49$)		女性参加者 ($n = 44$)	
	M	SD	M	SD
自己教育力	89.06	12.61	83.57	12.20
自信・プライド・安定性	4.31	1.04	4.00	0.95
成長・発達性への志向	5.59	0.97	5.53	0.70
自己への対象化と統制	4.51	1.06	3.99	1.19
LOC	103.43	16.75	98.02	15.03
努力感の低さ	3.94	1.42	3.40	1.02
社会的無力感	3.70	1.15	3.78	1.08
刹那性	4.60	1.04	4.44	1.06
運好機志向	4.65	0.99	4.31	0.95
自己統制の欠如	4.54	1.30	4.34	1.24

の方が高い傾向にあった ($t(91) = 1.666, p = .099, d = .346$)。なお、社会的無力感得点、利那性得点、自己統制の欠如得点および LOC 得点については有意な差はみられなかった ($t(91) = -0.324, p = .747, d = -.068$; $t(91) = 0.766, p = .446, d = .159$; $t(91) = 0.772, p = .442, d = .161$; $t(91) = 1.631, p = .106, d = .340$)。

尺度得点の年齢差 次に、年齢による差について検討するために分散分析を行った (Table5)。分析対象者の年齢の内訳は、19 歳が 34 名、20 歳が 29 名、21 歳が 21 名、22 歳が 5 名、23 歳が 3 名であった。22 歳と 23 歳は人数が少なく分析が難しいため 22 歳と 23 歳の 8 名を除き、19 歳、20 歳、21 歳での比較を行った。年齢不明が 1 名であったため、年齢差の分析対象者は 84 名であった。

その結果、内的一外的統制尺度の努力感の低さ得点について、年齢の主効果が有意であった ($F(2, 81) = 3.794, p = .027, \eta_p^2 = .086$)。Scheffe の多重比較を行ったところ、21 歳 ($M = 4.23, SD = 1.25$) は 20 歳 ($M = 3.29, SD = 1.07$) に比べ有意に努力感の低さ得点が高かった ($p = .027$)。

なお、内的一外的統制尺度の他の尺度得点と自己教育尺度の得点については有意な差はみられなかった (LOC 得点: $F(2, 81) = 1.858, p = .163, \eta_p^2 = .044$; 社会的無力感得点: $F(2, 81) = 0.799, p = .453, \eta_p^2 = .019$; 利那性得

点: $F(2, 81) = 0.926, p = .400, \eta_p^2 = .022$; 運好機志向得点: $F(2, 81) = 1.074, p = .347, \eta_p^2 = .026$; 自己統制の欠如得点: $F(2, 81) = 0.797, p = .454, \eta_p^2 = .019$; 自己教育性得点: $F(2, 81) = 1.387, p = .256, \eta_p^2 = .033$; 自信・プライド・安定性得点: $F(2, 81) = 1.199, p = .307, \eta_p^2 = .029$; 成長・発達性への志向: $F(2, 81) = 0.602, p = .550, \eta_p^2 = .015$; 自己への対象化と統制得点: $F(2, 81) = 2.081, p = .131, \eta_p^2 = .049$)。

自己教育性尺度と内的一外的統制尺度の尺度得点間の相関

自己教育性尺度の各尺度得点と内的一外的統制尺度の各尺度得点について、相関分析を行った (Table6)。

その結果、自己教育力得点は、内的一外的統制尺度の LOC 得点、社会的無力感得点、自己統制の欠如得点との間に有意な負の相関があり、利那性得点との間に有意な正の相関があり、努力感の低さ得点、運好機志向得点との間に有意な傾向の負の相関があった ($r = -.292, p = .005$; $r = -.575, p = .000$; $r = -.211, p = .042$; $r = .211, p = .042$; $r = -.196, p = .060$; $r = -.176, p = .091$)。自己教育性尺度の自信・プライド・安定性得点は、内的一外的統制尺度の LOC 得点、社会的無力感得点、自己統制の欠如得点との間に有意な負の相関があり、利那性得点との間に有意な傾向の正の相関があった ($r = -.282, p = .006$; $r = -.648,$

Table5. 年齢別の各得点の平均値と標準偏差 ($N = 84$)

	19歳参加者 ($n = 34$)		20歳参加者 ($n = 29$)		21歳参加者 ($n = 21$)	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
自己教育力	86.85	11.26	82.10	11.61	84.33	10.94
自信・プライド・安定性	4.14	0.95	3.80	0.83	4.05	0.87
成長・発達性への志向	5.52	0.74	5.50	0.75	5.71	0.73
自己への対象化と統制	4.45	1.00	4.16	1.13	3.82	1.26
LOC	102.06	17.43	96.59	17.13	105.43	13.92
努力感の低さ	3.74	1.23	3.29	1.07	4.23	1.25
社会的無力感	3.71	1.03	3.73	1.00	4.07	1.32
利那性	4.61	1.17	4.27	1.02	4.56	0.78
運好機志向	4.63	0.95	4.28	1.01	4.39	0.96
自己統制の欠如	4.39	1.22	4.49	1.22	4.83	1.36

$p = .000$; $r = -.214$, $p = .039$; $r = .178$, $p = .088$)。自己教育性尺度の成長・発達性への志向得点は、内的—外的統制尺度の利那性得点との間に有意な正の相関があり、運好機志向得点との間に有意な傾向の負の相関があった ($r = .207$, $p = .046$; $r = -.201$, $p = .054$)。自己教育性尺度の自己への対象化と統制得点は、内的—外的統制尺度の尺度得点とは、有意な関係はみられなかった。

なお、内的—外的統制尺度の下位尺度得点間においては、努力感の低さ得点と社会的無力感得点 ($r = .236$, $p = .023$)、運好機志向得点 ($r = .415$, $p = .000$)、自己統制の欠如得点 ($r = .226$, $p = .030$) の間に有意な正の相関がみられた。社会的無力感得点と運好機志向得点 ($r = .298$, $p = .004$)、自己統制感の欠如得点 ($r = .253$, $p = .015$) の間に有意な正の相関がみられた。利那性得点と運好機志向得点 ($r = .307$, $p = .003$) の間に有意な正の相関がみられた。自己教育性尺度の下位尺度得点間においては、自信・プライド・安定性得点と成長・発達性への志向得点の間に有意傾向の正の相関がみられた ($r = .184$, $p = .077$)。

自己教育力と LOC の関連

LOC が自己教育力に与える影響を検討するために、LOC 得点を説明変数、自己教育力得点を目的変数として重回帰分析を行った (Table7)。その結果、モデルが有意であり (R^2

$= .085$, $Adjusted R^2 = .075$, $F(1, 91) = 8.484$, $p = .005$)、LOC 得点が低いほど自己教育力得点が高いことが示された ($\beta = -.292$, $t = -2.913$, $p = .005$)。

次に、内的—外的統制尺度の下位因子が自己教育力尺度のどの下位因子に影響しているかを検討するために、内的—外的統制尺度の下位尺度得点である努力感の低さ、社会的無力感、利那性、運好機志向、自己統制の欠如を説明変数とし、自己教育力尺度の下位尺度得点である自信・プライド・安定感、成長・発達性への志向、自己の対象化と統制のそれぞれを目的変数とした重回帰分析を行った (Table8)。

自信・プライド・安定性得点を目的変数とした重回帰分析では、モデルが有意であり ($R^2 = .455$, $Adjusted R^2 = .424$, $F(5, 87) = 14.555$, $p = .000$)、社会的無力感の主効果が有意であった ($\beta = -.643$, $t = -7.419$, $p = .000$)。社会的無力感得点が低いほど自身・プライド・安定性得点が高いことが示された。なお、努力感の低さ、利那性、運好機志向、自己統制の欠如の主効果は有意ではなかった ($\beta = -.033$, $t = -0.370$, $p = .712$; $\beta = .139$, $t = 1.639$, $p = .105$; $\beta = .090$, $t = 0.950$, $p = .345$; $\beta = -.074$, $t = -0.881$, $p = .381$)。

成長・発達性への志向を目的変数とした重回帰分析では、モデルが有意であり ($R^2 = .121$, $Adjusted R^2 = .070$, $F(5, 87) = 2.385$, p

Table6. 自己教育性尺度と内的—外的統制尺度の各得点間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 自己教育力	—								
2 自信・プライド・安定性	.895 **	—							
3 成長・発達性への志向	.430 **	.184 †	—						
4 自己への対象化と統制	.393 **	.100	.100	—					
5 LOC	-.292 **	-.282 **	-.057	-.132	—				
6 努力感の低さ	-.196 †	-.151	-.107	-.109	.637 **	—			
7 社会的無力感	-.575 **	-.648 **	-.089	-.079	.573 **	.235 *	—		
8 利那性	.211 *	.178 †	.207 *	-.001	.550 **	.092	-.038	—	
9 運好機志向	-.176 †	-.082	-.201 †	-.120	.746 **	.415 **	.298 **	.307 **	—
10 自己統制の欠如	-.211 *	-.214 *	.001	-.113	.491 **	.226 *	.253 *	.140	.117

注. ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

= .045), 刹那性と運好機志向の主効果が有意であった ($\beta = .299, t = 2.769, p = .007$; $\beta = -.289, t = -2.409, p = .018$)。刹那性得点が高いほど運好機志向得点が高いほど、成長・発達性への志向得点が高いことが示された。なお、努力感の低さ、社会的無力感、自己統制の欠如の主効果は有意ではなかった ($\beta = -.016, t = -0.141, p = .888$; $\beta = .014, t = 0.128, p = .899$; $\beta = -.007, t = -0.065, p = .948$)。

自己への対象化と統制を目的変数とした重回帰分析では、モデルは有意ではなかった ($R^2 = .029, Adjusted R^2 = -.027, F(5, 87) = 0.516, p = .763$)。努力感の低さ、社会的無力感、刹那性、運好機志向、自己統制の欠如の主効果はすべて有意ではなかった ($\beta = -.048, t = -0.400, p = .691$; $\beta = -.012, t = -0.106, p = .916$; $\beta = .047, t = 0.416, p = .678$; $\beta = -.101, t = -0.797, p = .428$; $\beta = -.094, t = -0.835, p = .406$)。

性別の LOC が自己教育力に与える影響以上で行った t 検定において、変数に性差がみられたため、性別での回帰分析を行った。

まず、男性参加者について、LOC 得点を説明変数とし、自己教育力得点を目的変数

とした単回帰分析を行った (Table7)。その結果、モデルが有意であり ($R^2 = .126, Adjusted R^2 = .107, F(1, 47) = 6.763, p = .012$)、LOC 得点が高いほど自己教育力得点が高いことが示された ($\beta = -.355, t = -2.601, p = .012$)。

次に、内的-外的統制尺度の下位因子が自己教育性尺度のどの下位因子に影響しているかを検討するために、男性参加者について、内的-外的統制尺度の下位尺度得点を説明変数として、自己教育性尺度の下位尺度得点それぞれを目的変数とした重回帰分析を行った (Table9)。その結果、自信・プライド・安定性を目的変数とした重回帰分析では、モデルが有意であり ($R^2 = .478, Adjusted R^2 = .418, F(5, 43) = 7.887, p = .000$)、社会的無力感の主効果が有意であった ($\beta = -.624, t = -5.316, p = .000$)。社会的無力感得点が高いほど自身・プライド・安定性得点が高いことが示された。なお、その他の主効果はすべて有意ではなかった。成長・発達性への志向を目的変数とした重回帰分析と自己への対象化と統制を目的変数とした重回帰分析では、どちらもモデルは有意ではなかった (R^2

Table7. 自己教育力を目的変数、LOC を説明変数とした回帰分析の標準化 β

説明変数	参加者全体 ($n = 93$)	男性参加者 ($n = 49$)	女性参加者 ($n = 44$)	19歳参加者 ($n = 34$)	20歳参加者 ($n = 29$)	21歳参加者 ($n = 21$)
LOC	-.292 **	-.355 *	-.326 *	-.424 *	-.471 *	.030
R^2	.085 **	.126 *	.106 *	.180 *	.222 *	.001
Adjusted R^2	.075	.107	.085	.154	.193	-.052

注. ** $p < .01$, * $p < .05$

Table8. 参加者全体における自己教育性尺度の各下位尺度得点を目的変数、内的-外的統制尺度の下位尺度得点を説明変数とした重回帰分析の標準化 β ($N = 93$)

説明変数	自信・プライド・安定感	成長・発達性への志向	自己への対象化と統制
努力感の低さ	-.033	-.016	-.048
社会的無力感	-.643 **	.014	-.012
刹那性	.139	.299 **	.047
運好機志向	.090	-.289 *	-.101
自己統制の欠如	-.074	-.007	-.094
R^2	.455 **	.121 *	.029
Adjusted R^2	.424	.070	-.027

注. ** $p < .01$, * $p < .05$

$= .106$, $Adjusted R^2 = .002$, $F(5, 43) = 1.019$, $p = .419$; $R^2 = .123$, $Adjusted R^2 = .021$, $F(5, 43) = 1.201$, $p = .325$ 。

次に、女性参加者についても同様の分析を行った。まず、LOC 得点を説明変数、自己教育力得点を目的変数とした単回帰分析を行った結果 (Table7), モデルが有意であり ($R^2 = .106$, $Adjusted R^2 = .085$, $F(1, 42) = 4.981$, $p = .031$), LOC 得点が低いほど、自己教育力得点が高いことが示された ($\beta = -.326$, $t = -2.232$, $p = .031$)。続いて、内的一外的統制尺度の下位尺度得点を説明変数、自己教育性尺度の下位尺度得点それぞれを目的変数とした重回帰分析を行った (Table9)。その結果、自信・プライド・安定性を目的変数とした重回帰分析では、モデルが有意であり ($R^2 = .500$, $Adjusted R^2 = .434$, $F(5, 38) = 7.596$, $p = .000$)、社会的無力感と刹那性の主効果が有意であった ($\beta = -.525$, $t = -3.343$, $p = .002$; $\beta = .294$, $t = 2.185$, $p = .035$)。社会的無力感得点が低いほど、刹那性得点が高いほど、自信・プライド・安定性得点が高いことが示された。成長・発達性への志向を目的変数とした重回帰分析と、自己への対象化と統

制を目的変数とした重回帰分析では、どちらもモデルは有意ではなかった ($R^2 = .185$, $Adjusted R^2 = .078$, $F(5, 38) = 1.724$, $p = .153$; $R^2 = .118$, $Adjusted R^2 = .002$, $F(5, 38) = 1.019$, $p = .420$)。

年齢別の LOC が自己教育力に与える影響

以上の分散分析で、変数に年齢差がみられたため、19 歳、20 歳、21 歳の参加者別の分析を行った。19 歳の参加者についての分析では以下の結果が得られた。まず、LOC 得点を説明変数、自己教育力得点を目的変数とした単回帰分析では、モデルが有意であり (Table7; $R^2 = .180$, $Adjusted R^2 = .154$, $F(1, 32) = 7.011$, $p = .012$), LOC 得点が低いほど、自己教育力得点が高いことが示された ($\beta = -.424$, $t = -2.648$, $p = .012$)。続いて、内的一外的統制尺度の下位尺度得点を説明変数、自己教育性尺度の下位尺度得点それぞれを目的変数とした重回帰分析を行った (Table10)。自信・プライド・安定感を目的変数とした重回帰分析では、モデルが有意であり ($R^2 = .486$, $Adjusted R^2 = .395$, $F(5, 28) = 5.301$, $p = .002$)、社会的無力感の主効果が有意であった ($\beta = -.602$, $t = -3.597$, $p = .001$)。社会的

Table9. 性別の自己教育性尺度の各下位尺度得点を目的変数、内的一外的統制尺度の下位尺度得点を説明変数とした重回帰分析の標準化 β ($N = 93$)

説明変数	自信・プライド・安定感	成長・発達性への志向	自己への対象化と統制
男性参加者 ($n = 49$)			
努力感の低さ	-.073	-.081	-.143
社会的無力感	-.627 **	-.034	.057
刹那性	.007	.296	.105
運好機志向	.183	-.280	-.057
自己統制の欠如	-.139	.056	-.265
R^2	.478 **	.106	.123
$Adjusted R^2$	.418	.002	.021
女性参加者 ($n = 44$)			
努力感の低さ	.074	.025	.188
社会的無力感	-.525 **	.086	-.086
刹那性	.294 *	.378	-.111
運好機志向	-.156	-.366	-.365
自己統制の欠如	-.014	-.067	.167
R^2	.500 **	.185	.118
$Adjusted R^2$	.434	.078	.002

注. ** $p < .01$, * $p < .05$

無力感得点が低いほど自信・プライド・安定感得点が高いことが示された。成長・発達性への志向を目的変数とした重回帰分析、自己への対象化と統制を目的変数とした重回帰分析では、どちらもモデルが有意ではなかった ($R^2 = .104$, $Adjusted R^2 = -.056$, $F(5, 28) = 0.648$, $p = .664$; $R^2 = .225$, $Adjusted R^2 = .086$, $F(5, 28) = 1.622$, $p = .187$)。

次に、20歳の参加者について、同様の分析を行ったところ以下の結果が得られた。LOC得点を説明変数、自己教育力得点を目的変数とした単回帰分析では、モデルが有意であり (Table7; $R^2 = .222$, $Adjusted R^2 = .193$, $F(1, 27) = 7.687$, $p = .010$)、LOC得点が低いほど、自己教育力得点が高いことが示された ($\beta = -.471$, $t = -2.772$, $p = .010$)。続いて、内的-外的統制尺度の下位尺度得点を

説明変数、自己教育性尺度の下位尺度得点のそれぞれを目的変数とした重回帰分析を行った (Table10)。自信・プライド・安定性を目的変数とした重回帰分析では、モデルが有意であり ($R^2 = .531$, $Adjusted R^2 = .429$, $F(5, 23) = 5.200$, $p = .002$)、社会的無力感、刹那性の主効果が有意であった ($\beta = -.484$, $t = -2.559$, $p = .018$; $\beta = .352$, $t = 2.305$, $p = .031$)。社会的無力感得点が低いほど、刹那性得点が高いほど、自信・プライド・安定性得点が高いことが示された。成長・発達性への志向を目的変数とした重回帰分析、自己への対象化と統制を目的変数とした重回帰分析では、どちらもモデルが有意ではなかった ($R^2 = .174$, $Adjusted R^2 = -.005$, $F(5, 23) = 0.974$, $p = .455$; $R^2 = .278$, $Adjusted R^2 = .121$, $F(5, 23) = 1.772$, $p = .159$)。

Table10. 年齢別の自己教育性尺度の各下位尺度得点を目的変数、内的-外的統制尺度の下位尺度得点を説明変数とした重回帰分析の標準化 β ($N = 84$)

説明変数	自信・プライド・安定感	成長・発達性への志向	自己への対象化と統制
19歳参加者 ($n = 34$)			
努力感の低さ	-.213	-.013	.216
社会的無力感	-.602 **	-.119	.119
刹那性	-.011	.180	-.243
運好機志向	.132	-.190	-.333
自己統制の欠如	.000	.186	-.116
R^2	.486 **	.104	.225
$Adjusted R^2$	.395	-.056	.086
20歳参加者 ($n = 29$)			
努力感の低さ	-.220	.052	.347
社会的無力感	-.484 *	.222	-.371
刹那性	.352 *	.228	.045
運好機志向	-.061	-.420	-.487
自己統制の欠如	-.206	-.211	.256
R^2	.531 **	.174	.278
$Adjusted R^2$	.429	-.005	.121
21歳参加者 ($n = 21$)			
努力感の低さ	.179	-.028	-.328
社会的無力感	-.701 **	-.160	-.297
刹那性	.235	.058	.614 **
運好機志向	-.081	-.215	-.104
自己統制の欠如	.073	.303	.338
R^2	.684 **	.164	.592 *
$Adjusted R^2$	.579	-.115	.456

注. ** $p < .01$, * $p < .05$

次に、21 歳の参加者について、同様の分析を行ったところ以下の結果が得られた。LOC 得点を目的変数、自己教育力得点を目的変数とした単回帰分析では、モデルが有意ではなかった ($R^2 = .001$, $Adjusted R^2 = -.052$, $F(1, 19) = 0.017$, $p = .899$; $\beta = .030$, $t = 0.129$, $p = .899$)。続いて、内的一外的統制尺度の下位尺度の各得点を説明変数、自己教育性尺度の下位尺度のそれぞれの得点を目的変数とした重回帰分析を行った (Table10)。自信・プライド・安定性を目的変数とした重回帰分析では、モデルが有意であり ($R^2 = .684$, $Adjusted R^2 = .579$, $F(5, 15) = 6.505$, $p = .002$)、社会的無力感の主効果が有意であった ($\beta = -.701$, $t = -4.296$, $p = .001$)。社会的無力感得点が高いほど、自信・プライド・安定感得点が高いことが示された。自己への対象化と統制を目的変数とした重回帰分析では、モデルが有意であり ($R^2 = .592$, $Adjusted R^2 = .456$, $F(5, 15) = 4.351$, $p = .012$)、利那性の主効果が有意であった ($\beta = .614$, $t = 3.494$, $p = .003$)。利那性得点が高いほど、自己の対象化と統制得点が高いことが示された。成長・発達性への志向を目的変数とした重回帰分析では、モデルが有意ではなかった ($R^2 = .164$, $Adjusted R^2 = -.115$, $F(5, 15) = 0.588$, $p = .709$)。

4. 考 察

本研究では、自己教育力を規定する認知特性として、LOC を取り上げて検討した。その結果、概ね予測通り LOC が内的統制傾向であるほど自己教育力が高いことが示された。本研究は、生涯学習や現代の大学教育において求められる自己教育力に影響を与える認知特性のひとつを明らかにした点において意義があるといえる。

自己教育力と LOC の下位概念間の関連

本研究では、自己教育力の下位概念と

LOC の下位概念との関連を検討した。その結果、参加者全体についての分析では、LOC は自己教育力の自信・プライド・安定感と成長・発達性への志向という側面に影響を与えていることが示された。具体的には、LOC の下位概念である社会的無力感が低いほど自己教育力の自信・プライド・安定感が高く、LOC の利那性が高いほど運好機志向が低いほど、自己教育力の成長・発達性への志向が高いことが示された。つまり、社会的影響を及ぼすことができるという信念が高いほど (社会的無力感) 自己教育力の自信・プライド・安定感が高くなり、出たとこ勝負的に行動し目先のことに価値をおくほど (利那性)、成功を自分の能力や努力に期待するほど (運好機志向)、自己教育力の成長・発達性への志向が高くなることが示唆された。

本研究では、LOC が内的統制傾向であるほど、自己教育力が高くなるという仮説を立て、概ね仮説が支持される結果が得られたが、LOC の下位概念である利那性のみ、自己教育力に対して他の下位概念とは逆の正の影響を示していた。予測とは逆に、利那性が高いほど、つまり目先のことに価値をおくほど、成長・発達性への志向が高いことが示されたのである。この結果から、遠い将来のことに価値をおくより、目先のことに価値をおいた方が人の行動は強化されやすいため、利那性が高い個人は目先の小さな成長を多く経験し、その結果、成長・発達性への志向が高いという可能性が示唆される。しかし、このような結果が得られた理由として、尺度の妥当性の問題も考えられる。本研究で使用了利那性の測定項目が楽観性を測定していた可能性が考えられるのである。楽観性は、「物事がうまく進み、悪いことよりも良いことが起こるという信念を一般的にもつ傾向」と定義されている (Scheier & Carver, 1985)。水口 (1985) の内的一外的統制尺度において利那性を測定する項目は、“厄介なことを決断し

なければならないとき、丁か半かで決めると案外うまくいく”，“人生は成り行きに任せた方が、案外うまくいく”などであり、これらの項目は楽観性を測定していた可能性が考えられる。楽観性は、精神的・身体的健康を促進し（張・外山，2015），「困難な状況にさらされ、ネガティブな心理状態に陥っても重篤な精神病理的な状態にはならない，あるいは回復できるという個人の心理面の弾力性」（無藤・森・遠藤・玉瀬，2004）と定義されるレジリエンスの構成概念の1つであること（石毛・無藤，2005）が示されている。このように、楽観性はポジティブな特性と関連していることが多くの研究で示されており、自己教育力に対しても、正の影響を示した可能性が考えられる。本研究で使用した尺度が楽観性を測定していたかどうかや、楽観性が自己教育力に正の影響を示すかどうかは今後の検討課題である。

性別での異同

性別での検討を行った結果、男性参加者においても女性参加者においても、LOC が内的統制傾向であるほど自己教育力が高いことが示された。

下位概念を含めた分析では、男性参加者においては、LOC の社会的無力感が低いほど自己教育力の自信・プライド・安定感が高いという結果が得られた。女性参加者においては、LOC の社会的無力感が低いほど、刹那性が高いほど自己教育力の自信・プライド・安定感が高いことが示された。

以上の結果から、性別によって、自己教育力に影響を与える LOC の側面が異なることが示された。具体的には、男性においては、社会的無力感のみが自己教育力の自信・プライド・安定感に影響を与えていたが、女性においては、社会的無力感の他に刹那性も自己教育力の自信・プライド・安定感に影響を与えていた。

年齢別での異同

年齢別での検討を行った結果、19 歳の参加者と、20 歳の参加者においては、LOC が内的統制傾向であるほど自己教育力が高いことが示された。しかし、21 歳の参加者においては、有意な結果は得られなかった。

下位概念を含めた分析では、19 歳の参加者においては、LOC の社会的無力感が低いほど自己教育力の自信・プライド・安定感が高いことが示された。20 歳の参加者においては、LOC の社会的無力感が低いほど、刹那性が高いほど、自己教育力の自信・プライド・安定感が高いことが示された。21 歳の参加者においては、LOC の社会的無力感が低いほど、自己教育力の自信・プライド・安定感が高く、LOC の刹那性が高いほど、自己教育力の自己の対象化と統制が高いことが示された。

以上の本研究の結果では、LOC 得点と自己教育力得点との単回帰分析において、19 歳と 20 歳の参加者については有意な結果が得られたが、21 歳の参加者については有意な結果は得られなかった。このような結果が得られた理由として、21 歳の参加者の下位概念を含む分析結果では、刹那性が強い影響力を示していたことが挙げられる。具体的には、21 歳参加者の重回帰分析の結果を見ると、刹那性の β の値は 0.614 であり、他の変数の値よりも大きな値を示している（Table10）。参加者全体の分析と同様に、刹那性のみ正の影響を示しているため、下位尺度得点の合計値である LOC 得点の自己教育力に対する影響力が相殺され、有意な値とならなかった可能性が考えられる。

分析結果から、19 歳の参加者では、LOC の社会的無力感のみが自己教育力の下位概念に影響を与えているが、20 歳と 21 歳の参加者では、LOC の社会的無力感に加え、刹那性も自己教育力の下位概念に影響を与えていることが示された。このような結果が得られ

た理由として、大学生の年齢による経験の違いが考えられる。挫折感、絶望感やリアリティショックによって、自己教育力が低下することが示唆されている（小山他，1995）。大学生が就職活動を始める 20 歳以降の参加者は、リアリティショックを経験し、自己教育力が低下していたのかもしれない。また、就職活動だけでなく、大学生活を長く経験しているほど大学での学びや多様な人々との人間関係等で挫折感、絶望感やリアリティショックを経験する可能性が高くなると考えられる。本研究では、自己教育力得点について有意な年齢差は得られなかったが、平均値を比較すると、19 歳に比べ、20 歳、21 歳の得点が低くなっている。このように、自己教育力が低下した際には、以上で述べた通り楽観性の内容を含む利那性が自己教育力に正の影響及ぼすのかもしれない。

本研究の限界と今後の課題

最後に本研究の限界と今後の課題を 4 つ述べる。第 1 に、本研究では、LOC が自己教育力に与える影響を回帰分析を用いて検討したが、これらの因果関係は明確ではない。今後は縦断的研究や実験的操作を用いた研究が必要である。

第 2 に、本研究の結果から、LOC の下位

概念のうち自己教育力に影響を与えている因子が、性別や年齢別で異なることが示された。どのようなメカニズムでこのような差異が生じるのかを検討するために実証的研究を行う必要がある。

第 3 に、第 2 の点とも重なるが、本研究では 19 歳、20 歳、21 歳別に分析を行い、19 歳の参加者と 20 歳、21 歳の参加者で異なる結果が示された。この結果について、以上の考察では就職活動の体験の有無による差であるという可能性を述べたが、本研究では参加者の就職活動体験の有無を尋ねていないため実際に 20 歳と 21 歳の参加者が就職活動を体験していたかどうかはわからない。大学生における就職活動の体験は個人の認知に影響を与えうるものであると考えられるため、就職活動の体験の有無による検討を行う必要があると考えられる。

最後に、本研究は大学生を参加者として調査を行い、LOC が自己教育力に与える影響を検討したが、本研究の結果からも年代によって自己教育力に影響を与える LOC の下位概念の内容が変わる可能性が考えられる。今後は大学生以外の参加者についても検討する必要がある。

(注)

- 1) 本論文の作成にあたりご指導頂いた外島裕先生(日本大学商学部)に感謝申し上げます。

(引用文献)

- 羽石 寛寿・地代 憲弘・外島 裕・松田 浩平・渡辺 文夫 (1995). 経営組織診断の理論と技法 同友館
- 石毛 みどり・無藤 隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連－受験期の学業場面に着目して－ 教育心理学研究, 53, 536-367.
- 石田 有紀・園田 直子 (2016). 一人配置の養護教諭の自己教育力と職務上困難感との関連 応用心理学研究, 42, 12-19.
- 梶田 叡一 (1985). 自己教育への教育 明治図書

- 鎌原 雅彦・樋口 一辰・清水 直治 (1982). Locus of control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討
教育心理学研究, 30, 38-43.
- 小山 悦司・河野 昌晴・赤木 恒雄・加藤 研治・別惣 淳二 (1995). 教師の自己教育力に関する調査研究—自己教育力の構造的把握と経年的推移— 岡山理科大学紀要, 30B, 151-162.
- 篠原 弘章・井上 大介 (1991). 両親の養育態度が児童の自己教育力に及ぼす影響について: とくに友人やきょうだいの賞賛・叱責場面について 熊本大学教育学部紀要, 40, 305-324.
- 張 珺・外山 美樹 (2015). 楽観性と悲観性が精神・身体的健康に与える影響のメカニズムの日中比較
心理学研究, 86, 424-433.
- 永田 敬・林 一雅 (2016). アクティブラーニングのデザイン—東京大学の新しい教養教育— 東京大学出版
- 花田 妙子 (2010). 支援形成と自己教育力が心筋梗塞患者の自己管理行動に及ぼす影響 健康心理学研究, 23, 22-33.
- 速水 敏彦・長谷川 孝 (1979). 学業成績の因果帰着 教育心理学研究, 27, 47-55.
- 平島 豊・伊藤 満梨加・道志 勝・國井 みどり・井手口 直子 (2009). 新人薬剤師の不安の構造と自己教育力との関係 YAKUGAKU ZASSHI, 129, 549-556.
- 藤田 正 (2012). 学習課題先延ばし行動に及ぼす自己調整要因の検討 奈良教育大学紀要, 61, 43-51.
- 水口 禮治 (1985). 無気力からの脱出 福村出版
- 無藤 隆・森 敏昭・遠藤 由美・玉瀬 耕治 (2004). 心理学 有斐閣
- 森 敏昭・清水 益治・石田 潤・富永 美穂子・Chok C. H. (2002). 大学生の自己教育力とレジリエンスの関係 学校教育実践学研究, 8, 179-187.
- Bonwell, C. C. & Eison, J. A. (1991). *Active Learning: Creating Excitement in the Classroom* (J-B ASHE Higher education report series (AEHE). Jossey-Bass.
- Gale, C. R., Batty, G. D., & Deary, I. J. (2008). Locus of Control at Age 10 Years and Health Outcomes and Behaviors at Age 30 Years: The 1970 British Cohort Study. *Psychosomatic Medicine*, 70, 397-403.
- Ghasemzadeh, A., & Saadat, M. (2011). Locus of control in Iranian university Student and it' s relationship with academic achievement. *Procedia-Social and behavioral sciences*, 30, 2491-2496.
- Hasan, S. S., & Khalid, R. (2014). Academic Locus of Control of High and Low Achieving Students. *Journal of Research and Reflections in Education*, 8, 22-33.
- Janssen, T., & Carton, J. (1999). The effect of locus of control and task difficulty on procrastination. *The journal of genetic psychology*, 160, 436-442.
- Mirels, H. L. (1970). Dimensions of internal versus external control. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 34, 226-228.
- Nowicki, S., & Strickland, B. R. (1973). A locus of control scale for children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 40, 148-154
- Özen-Kutanis, R., Mesci, M., & Övdür, Z. (2011). The Effects of Locus of Control on Learning Performance: A Case of an Academic Organization. *Journal of Economic and Social Studies*, 1, 113-136.”
- Rotter J. B. (1966). Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement.

Psychological monographs: General and applied, 80, 1-28.

Ryon, H. S., & Gleason, M. E. J. (2014). The Role of Locus of Control in Daily Life. *Personality and social psychology bulletin*, 40, 121-131.

Scheier, M. F., & Carver, C. S. (1985). Optimism, Coping, and Health: Assessment and Implications of Generalized Outcome Expectancies. *Health psychology*, 4, 219-247.

Trice, A. D. (1985). An academic locus of control scale for college student. *Perceptual and motor skills*, 61, 1043-1046.

Wllston, K. A., Wallston, B. S., & Devellis, R. (1978). Development of the Multidimensional Health Locus of Control (MHLC). *Scales Health education monographs*, 6, 160-170.